

神奈川文芸賞 [2024]

荒い息を飲み込んで、賢太は目を凝らした。大きな自動ドア越しに、ロビーが見えた。待合スペースはがらんとし、受付から漏れる僅かな光が並んだ長椅子を照らすだけだ。ガラス扉に映る透き通った自分が、向こうの柱にかかった丸い時計に重なっている。賢太は、時計を覗いた。黒く太い短針が、昼をこつに過ぎたことを告げていた。

「おいちゃん……」

昨日、祖父が入院した。

祖父は平気だと、母は賢太に何度も言い含めた。しかし、病室で心細くないだろうか。そんなハテナが一つ浮かぶと、彼の内側でハテナは瞬間に増えていった。ちゃんとご飯を食べているだろうか。夜は眠れただろうか。どうしてハテナが彼に近づいて、収まりきらなくなってきた。堪らず、友達の家で遊びに行く嘘をつき、来てしまったのだ。

祖父は寡黙な人だ。話しかけられてもぎこちなく頷くばかりだから、母とおしゃべりは弾まない。リビングで祖父と二人きりになると、彼女は困り顔で時間を待たせていた。

他の人にもそうだ。宅配のお兄さんや自治会のおじさんにも、祖父は深々と一礼するだけで早々に家に引込んでしまう。だから、周りにもどつつきにくいと思われているに違いない。特に父とは、互いに無視を決め込んだように言葉交わさず、日々顔を合わせていても、違う次元にいるみたいだ。父が祖父のために遠くまで送迎をしても、口を真正文字にしてありがとすら言わないし、祖父が父の郵便物を郵便受けから取ってきても、父はほかかと口を開けソファで寛ぎ、知らんぷり。穏やかな父が見せる、別の一面。そんなことがある度、賢太の心にざらざらしたものが入り込んでくる。実の親子なのに、賢太と父とは全く違う。賢太は不思議でしかなかった。二人はずれ違ったまま、回転扉のようにぐるぐる回り続けている。

祖父は、賢太にも決して口数は多くなかったが、眼差しは温かかった。毎朝小さく挨拶をした後、皺に埋もれた目をパチパチさせながら賢太の頭を撫でて、こつこつとした大きな手でそつと寝かせを直してくれるのだ。

祖父の手は魔法の手だった。賢太が部屋に遊びに行くと、必ず祖父は文机の引き出しから色紙を取り出し、静かに折り紙を始めた。丁寧な折り紙を始めた。慣れた動きは、皺くちゃの大きな手からは想像でき

ないくらい繊細だ。賢太はその動きに釘づけになる。平らな紙が躍動し、あつという間に形を変える。オレンジのカフト虫、黄緑のゴリラ、ピンクのティラノサウルス、カラフルな三十六面体。祖父が折るだけで、紙はどんな形にもなるのだ。創造主が命を吹き込む。祖父の折り紙は、神聖なものさえ感じさせた。

中でも紙飛行機は、とりわけ格好良かった。祖父の紙飛行機は、賢太の知るとの紙飛行機とも違って

いた。あるべき場所にあるべきものがある。直線が

母が走り書きしたチラシの、隅この数字を思い出し、賢太は急いだ。

正面入口の隣には、ちょっとした庭があり、ぐる

りと病棟が囲んでいた。賢太は中庭から病棟を見渡

した。沢山の小さな窓が、規則正しくこちらを向い

ている。けれど、ここからどう病室に辿り着けるの

か見当がつかない。

「そうだ、三〇五号室だ」

「おいちゃん……」

「……よし」

賢太はしゃがんで、リュックから色紙を出した。

一緒に折ろうと持ってきた金色の束。

「賢太、これ」

祖父は時々金と銀の色紙をくれた。もちろんいつ

もの真顔で。金銀の色紙は、祖父から賢太へ授与さ

れた表彰メダルのように、使うのが勿体なくて貯め

ていたのだ。銀色は、この前、悩みぬいた末に図工

の授業で使ってしまった。魚の鱗になって教室に

飾られている。賢太の自慢の貼り絵として。

束から一枚、投げ出したリュックの背に慎重に置

く。

U-25 小説部門：最優秀賞・三菱地所横浜支店賞  
オリカサナル / 中川泰明



イラスト / 滝澤志保 (県立相模原弥栄高校美術部2年)

折る毎にこれで合っているのか、皺が寄っていない

深呼吸をしても指先が震える。ぎゅっと紙をつま

むと、鏡のような表面に歪みが生まれた。もう後戻

りできない。賢太はお腹にぐゅんと力を入れ、祖父

の手さばきを思い出しながら、紙を折っていった。

「おいちゃん……」

「……よし」

賢太はしゃがんで、リュックから色紙を出した。

一緒に折ろうと持ってきた金色の束。

「賢太、これ」

祖父は時々金と銀の色紙をくれた。もちろんいつ

もの真顔で。金銀の色紙は、祖父から賢太へ授与さ

れた表彰メダルのように、使うのが勿体なくて貯め

ていたのだ。銀色は、この前、悩みぬいた末に図工

の授業で使ってしまった。魚の鱗になって教室に

飾られている。賢太の自慢の貼り絵として。

束から一枚、投げ出したリュックの背に慎重に置

く。

か、不安になってく。

リュックの上に紙飛行機が現れた。紙飛行機は燃

れているが、直す余裕はない。賢太はそれを手に持

って、病棟の窓を数え始めた。

「おいちゃん……あそこかな」

改良して作ったんだ。一回転するんだぞ、凄いだろ

地面に散らばる紙飛行機を、父が一つ一つ拾い集

めていく。

「おいちゃん、明後日手術なんだ。血管にできた

瘤を、取らないといけないよ」

集めた紙飛行機を抱え、父は空を見上げた。

「おいちゃんは大丈夫。大丈夫。大丈夫」

賢太はその声が、父の祈りにも聞こえた。

「折れ重ねたんだよ」

賢太はもう一度父の紙飛行機を見つめ、大切にリ

ュックにしまった。どこか晴れやかな気持ちがあった。

日はまた昇るのだ。

「何回か沈んだって、僕が受け止めてやる」

父が抱えるくしゃくしゃの紙飛行機を一つもら

い、開いて皺を伸ばした。再び、それを丹念に折り

上げていく。みるみる内に立派な紙飛行機が出来上

がった。折り目だらけだが、伸ばした翼が凜々しか

った。

「お父さん、この紙飛行機、おいちゃんに見せた

い」

「ついでにどうか？」

「ううん、大丈夫。ひとりでいきたいんだ」

「じゃあお父さんはここで待ってる。あそこの扉を上

あんなに燃えていた空が、暗く沈んだ。

その時、どこからともなく一機の紙飛行機が、滑

り込んできた。そして、賢太の目の前でぐるりと輪

を描き、足元に音もなく着地した。祖父の紙飛行機

によく似ている。手に取って見ると、両翼に折り直

した跡がある。そうか、折り直したらいいんだ。

「賢太、やっぱりここだったのか」

驚いて顔を上げた。スーツ姿の父が立っていた。

「紙飛行機か、よく親父と折ったな」

賢太が持つ紙飛行機に、父は目をやった。

「その紙飛行機、父さんのオリジナルなんだ。子供

の頃、おいちゃん真似てもなかなかできなくて、

か、不安になってく。

リュックの上に紙飛行機が現れた。紙飛行機は燃

れているが、直す余裕はない。賢太はそれを手に持

って、病棟の窓を数え始めた。

「おいちゃん……あそこかな」

窓は開け放たれていた。あそこには、気づいて

てくれるはずだ。狙いを定め、目一杯腕を振り上げ

紙飛行機を飛ばす。しかし勢いが足りなかったのか、

風にもよる流されてしまった。先端が潰れて、も

う使いものにならない。

講評

言葉ではなく、折り紙を通して心を通わせる寡黙な祖父と主人公賢太。家族の関係性を描く前半から、緊張感の走る祖父の入院の後半まで、展開の描写が素晴らしく美しい情景のように感じました。賢太が感じる漠然とした「みらい」への不安。それを奇をてらいすぎない言葉運びにより巧みに描き、読者へダイレクトに焦燥感を伝えてくれる点が見事でした。父と賢太の思いを乗せて「オリカサナル」紙飛行機が祖父の元に届きますように。(三菱地所株式会社 横浜支店長 細野 徳重)

紙飛行機が描く軌跡を見つめる賢太の真つすぐな視線に心打たれた。自身の不安が父との会話の中で次第に軽くなり、折った紙飛行機と共に空へ放たれていくところがすがすがしい。病院に到着するまでの間の心の動きと祖父の人間描写との対比がうまい。病院の中庭で紙飛行機を折っては飛ばす様が、賢太の祖父を思う心情と折り重なって伝わってきた (かなとも会員コメントから抜粋)

作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としております。